

# “恥じらい”に関する心理学的一考察

小林 良夫

## まえおき

最近耳にすることの1つに、「このごろの若者は恥じらいを知らない」というのがある。

このことについては筆者もかねてから同様の感想をいっていたが、その一方で、大人たちは一体どんな基準で若者たちを非難しているのだろうかとか、恥じらい感の減少が、彼等の成長・発達あるいは社会にどのような影響をもたらすのか……等についての疑問も持っていた。

そんなある日、朝日新聞の論壇に掲載された大林道子<sup>1)</sup>の「助産婦の男性解放論は疑問」という論文が目にとまった。要旨は、「妊婦は男性医に対してさえ強い恥じらいを感じている。だから、男性の助産婦(夫)は好ましくない」というものである。

ここにおいて、もし恥じらいの実際が大林のいうようであるならば、少なくとも女性に関しては冒頭のような非難は差し控えねばならないことになる。しかし、それが世人のいう通りであり、しかもその原因が乳・幼児期からのしつけ不良による感情の未発達にあるとすれば、家庭教育機能の強化はもとより、幼稚園教諭や保母になることを希望する学生の指導にあたるわれわれにも、緊要な課題として重くのしかかってくることになる。

このように考えてみると、たかが恥じらい、ではすまされなくなる。そこでこれらに係る書物を1・2ひもといてみた。その結果、精神医学の方では対人恐怖症解明の必要から多くの研究がなされているようであるが、心理学の

分野では多湖輝<sup>2)</sup>がいうように「このあたりの問題は十分研究されていない盲点であり、今後の研究成果にまたねばならない」ことがわかったので、浅学を顧みず問題の解明を試みることにした。

いうまでもなく恥じらいの研究は、大脳生理学や文化人類学など多方面からのアプローチを必要とするが、今回はとりあえず社会心理学的な面を中心にとりあげることにした。

なお、調査及び記述にあたっては、あとがきに記したような理由から女性を中心としたことを了とされたい。

## 1 恥じらいとは

辞書によると、「恥じらいとは恥じらうこと」であり、それは「恥ずかしいこと」と記されており、更に「恥ずかしい」とは、a きまりが悪いこと。b 自分の劣っていることを感じて気おくれすること。c 気がつまることをいい、また、「恥」とは、d 面目を失うこと。e 体面をそこなうこと。f 恥を恥とすることとある。

その具体例を、女子短期大学の学生(以下短大生という)を対象にして行った調査結果から引用して例示すると、さしづめaは、友だちだと思って相手の肩に手をかけたところ他人だったので、とてもきまりが悪かった。b 集会に出かけたとき遅刻し、しかも自分だけ流行おくれの洋服だったので気おくれを感じた。c 教師の質問に答えられなかったので体裁が悪かっ

た。d 多くの人の前で失敗をして笑われ、面目を失った。e 自分の席と思いきんで指定席に座っていた時、後から来た人に間違いを指摘され、とても気まずく思った。f 下着が見えるような座り方をしている同性の姿を見て気恥ずかしく思った。ということになる。

以上の引用例からも知られるように、一般的には、恥じらいと恥を区別しないで使用しているようであるが、本稿では、一応「恥じらいとは、他人に知られたくない自我の中核的なものが他者によって暴かれたり、あるいは暴かれそうになったときに見られる自己防衛的な感情で、紅潮、ふくみ笑い、顔を伏せたり隠すなどの表情を伴うものをいう」と定義しておく。

## 2 恥じらいの発生条件

恥じらいがいかなる条件下で発生するかについては前項でも若干ふれたが、その主なものとして次の3点があげられようかと思う。

すなわち

- 1) 隠しておきたいことやものが暴かれたり、暴かれそうになった場合
- 2) 名誉が汚されたり、傷つけられそうになった場合
- 3) 自分に対する評価において、自分と他人との間に差が生じた場合

がそれである。以下それぞれについて若干補足する。

なお、多湖輝らは発生場面としてsex、排泄、飲食にかかわる場合をあげている。

### 1) 隠しておきたい事物が暴かれたり、暴かれそうになった場合について

われわれは日々の生活において、他人に知られたくないことや隠しておきたいものを数多く持っている。その一例を先にあげた大林の調査結果に見ることができる。すなわち、妊婦は診療時における最も恥ずかしいこととして88%の者が内診を、また、出産時におけるそれについて男性医による内診26%、下半身の露出25%を

あげている。

このように見られたくないもののトップはどれも性器のようである。だからこれらを恥部というのであろうが、恥部を隠したがるのは何も女性だけではない。男性だって同じである。

隠したがる理由については後述するので、ここでは、それらがわれわれの欲求の中でも強いといわれる性欲に関係するという。性器の持つ機能や形状等よりして他者との比較を避けたがること。更に幼時からの性に関するしつけが与かっている。の3点をあげるに止める。

そんなことからわが国では、刑法第176条において「強制わいせつ」の罪を、また、軽犯罪法第1条23号において「通常衣服をつけないでいるような場所をひそかにのぞき見た者」は罰する旨の規定をしているのであろう。

上述の場合は、秘匿しておきたいことやものを暴かれた時であったが、暴かれそうになった場合にも恥じらいは起きる。例えば通行中に、風のいたずらでスカートや着物の裾が巻きあげられそうになった時に見せる女性の仕草がそれである。が、その理由については今更述べるまでもなからう。

しかし、このように暴かれることを嫌ったり、恥ずかしがったりする若い女性が、自分の意志とはいえ超ミニスカートを着用したり、夏の海浜やディスコで惜しげもなく体を露わにしていると聞く。この矛盾した心理をどのように理解したらよいのであろうか。関心の持たれるテーマではある。

### 2) 名誉が汚されたり、メンツが傷つきそうになった場合について

極論すると、われわれの毎日はメンツ維持を始めとする保身の連続であるともいえる。従って、われわれはメンツが汚されることを極度に恐れ、そのような機会の到来を避けようとする。

その実際を、例えば、受け取った成績表を他人にかくれて見ようとする児童や、保育室内でのおもらしをこっそり教師に告げる園児の姿に見ることができる。

いうまでもなく、不良な学業成績や遺尿は自

己の能力の低さをさらけ出す以外の何ものでもない。このことは当然に自尊心を損なうことになるのでなんとしてでも避けたい。そんな中で見られる自己蔑視的、あるいは繕い的な仕草が、ここにいう恥じらいである。

### 3) 自分に対する評価において、自他の間に差が生じた場合について

われわれは、それぞれが自己像を持っている。そして日々、より高次の自己像の確立をめざして努力しているが、その実現は容易でない。そのため、止むなく見せかけの自己像で満足したりしている。

そんな中で、たまたま第三者から高い評価を受ける場合がある。良い評価を受けたのであるから内心はうれしく、誇らしく思ったりするが、人前ということもあって手放して喜べない。と、いって、このままでは高まった気分を静めることができない。そんな時、評価されたこととは無関係な言葉を発したり、他人に手を出したり、オーバーな行動をするなど、いうところのてれ行動をとる。

以上のてれ行動はプラスの評価を受けた時であったが、マイナスの評価を受けたときにも同様の行動は見られる。しかし、その心情において不快感や屈辱感が充満しているという点で前者と大きく相違する。

恥じらいの一種であるてれるという行動は、これら以外の場合にも見ることができる。例えば、外出先で家族の者に出会った時や、前方か

らくる親友に出会う直前などがそれであるが、その理由としては、内沼幸雄<sup>3)</sup>がいうように「いつもと違う間のとり方に当惑した結果による」などをあげることができよう。

以上のように考えてくると、恥じらいは、われわれが窮地に追いこまれ、逃げるに逃げられないような時に自分の身を守るためにとる行動、すなわち上野千鶴子<sup>4)</sup>がいう「しりごみのしぐさ」であるということもできる。

## 3 恥じらいの発達

幼稚園や保育所を訪問した時に思うことの1つに、園児の見せる恥じらいには年齢差、男女差があるのではというのがある。そこで、それはいつごろ、どのような形で表われ、どのように変化するかを知りたいと思い、幼児及び短大生を対象に調査してみた。以下その結果を紹介しながら、恥じらいの始期及び場面を明らかにしようと思う。

### 1) 恥じらいの始期

恥じらいの始期を知るため、まず園庭で泥んこ遊びに興ずる幼児のうち、ぬれたパンツを脱ぎ捨てて素っ裸で遊び続ける園児と、ぬれたパンツを着用したまま遊ぶ園児の数を幼稚園教諭桑田裕子、酒井由恵、田鍋英代、土田玲子らの協力を得て調査してみた。その結果が表1及び図1である。

表1 ぬれたパンツ着用率

年齢	性別	調査対象人員	パンツ着用率
3	男	58 %	13 %
	女	58	40
4	男	90	27
	女	75	47
5	男	71	46
	女	79	80

注 1. 調査対象：4 幼稚園児 432名  
2. 調査時期：平成4年5～6月  
3. 調査方法：行動観察  
4. 調査者：幼稚園教諭

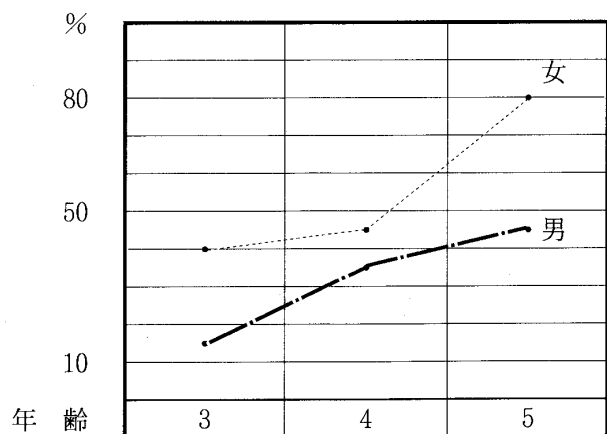


図1 ぬれたパンツ着用率

たしかに泥んこ遊びの際、汚れたパンツを着用したまま遊び続けるかいなかについては、家庭における養育方針及び実際、当人の性格、園の方針等が関わってくると思うが、ぬれたパンツを脱ぐことができないのは、恥じらいが強い故とも解される。このような前提に立って本結果を概観すると、年齢が長ずるにつれて性器の露出を嫌う者が多くなる。つまり4歳のころから強く恥じらうようになり、しかも、それは男児より女児に顕著であることが知られる。

また、短大生130名を対象にして「恥ずかしがり始めた時期はいつか」について調査したところ、1～2歳のころが20%、3～4歳ころ28%、5～6歳ころ10%、その他（含無回答）42%という結果であった。

これらよりして筆者は、恥じらいの始期は幼

児前期と考えているが、生後6～8月ころに見られる“人見知り”をその始期とする者<sup>5)</sup>や、大場幸夫<sup>6)</sup>らのように2歳以降とする研究者のいることを付け加えておく。

## 2) 恥じらい行動が見られる場面

幼児前期より見られ始めた恥じらいの感情は、その後どのように発達・変化するのであろうか。

このことを明らかにするには、恥じらう事由を年齢別に見ていった方が手取り早いようである。そのような目的のもとに作成したのが表2及び表3である。

すなわち、表2は、幼児が示す恥じらい行動の発生事由を前記幼稚園教諭による観察結果と、短大生の内省にもとづくそれとを比較表示したものであり、表3は、短大生がいう「恥じらい

表2 幼児が示す主な恥じらい事由

年齢	性別	観察対象人員	主 な 事 由	
			幼 稚 園 児	短 大 生
3	男	86	おもらしをした。 人前での発表。	はじめての人にあった。 人前での発表。 指名されたのに答えられなかった。 自分の意見が言えなかった。
	女	94	おもらしをした。それをひやかされた。 人前での発表。	
4	男	95	ほめられた。(てれる) おもらしをした。 折角指名されたのに答えられなかった。	
	女	120	おもらしをした。	
5	男	126	好きな女の子のことでひやかされた。 プール遊び前後における着替え。 叱られた。 人前での発表。	来客にお茶を出すよういわれた時。 人前での発表。 叱られているところを友だちに見られた。
	女	134	人前での発表。 女児の遊びグループへ男児が入ってきた。 プール遊び前後における着替え。 叱られた。	

- 注 1. 調査対象：4幼稚園児 655名、短大生 130名。  
 2. 調査時期：平成4年5月。  
 3. 調査方法：幼稚園児については担任教諭の行動観察。短大生の場合は質問紙法による。  
 4. 人前での発表には、意見発表、朗読、ピアノ演奏等を含む。

表3 女子学生がいう恥じらいを強く意識した年齢と事由

年齢(おおむね)	%	主  な  事  由
6～7歳	21	人前での発表。罰として立たされたり、残されたりした。教師などの質問に対して間違っただけをした。おもしろしをした。
8～9歳	14	自分の容姿を気にして。罰として立たされたり、残されたりした。父親との入浴。水泳前後の着替え。人前での発表。男の子を意識して。
10～11歳	13	男の子を意識して。人前での発表。父親との入浴。質問に対して間違っただけをした。他人と違ったことをして。
12～13歳	18	男の子を意識して。生理が始まった。人前での発表。性教育の授業。髪や服装が乱れていた。

- 注 1. 本表は、調査対象者130名中回答のあった80について作成した。  
2. 調査時期・方法は表2に同じ。

を強く意識しはじめた年齢とその事由」を示したものである。

以上2つの調査から恥じらう事由をまとめてみると、幼児前期は、男児女児ともおもしろしなどの生理的失敗や、人前での意見あるいは学習成果の発表を理由とするものが多く、それに続く幼児後期も前期と大差ないが、プール遊び前後における衣服の着替え時、すなわち性別意識にもとづくと思われる恥じらいのほか、てれ行動も見られるようになる。

児童期には、対人意識が強まることもあってか容姿、能力など他人との比較に関わるものや、異性意識の芽生えに伴う恥じらいが、また、青年前期には、第二次性徴の発現に伴う各種恥じらいが見られるようになってくる。

このように恥じらいは、年齢が長ずるにつれてより社会的になるほか、例えば、書物の中に出てくる人物に同一化して恥ずかしく思ったり、「入浴時恥部をかくすのは、部位を見られることよりも隠すことを知らない非常識さを笑われるのが恥ずかしいからだ」と喝破する年配女性の言にみられるように、複雑・高次なものへと変化していく。しかし、それとても、ある年齢あるいは状態になると減少したり、消失したりするようである。その理由については後でふれることにする。

#### 4 恥じらいの構図

ここで、今まで述べてきたことを整理することを兼ねて、恥じらいがいかなる要因によって組み立てられているのかについて考えてみる。

##### 1) 恥じらいは、対人関係の中で発生する

園原太郎は「恥じらいの中核に、見られているという感じが存在する」という。

他人に見られるということはうれしいことである。しかし、それが見つめられの域に達すると不快になるばかりか、不安や恐怖さえ感ずるようになる。特に若い女性の場合、見つめられる部位が目、口もと、胸部、股などの場合はなおさらのようである。

そこで見つめられた側は、相手から目をそらす。顔を伏せる。顔を隠す。(図2) 体の一部や持物をいじる。部位を隠す(図3)など、いところの恥じらいの表情を示すことになる。

このように恥じらいは、主として対人関係場面におけるバランスの維持や、不快な場面から逃げようとしたときに発生する。その意味において「人が出会い、目が合うと、2人は自分たちが葛藤状態に陥ったことに気づく」というデズモンド・モリス<sup>7)</sup>(Desmond Morris)の説は、園原太郎同様説得力を持つ。



図2 「セクシーギャルの大研究」 P146より



図3 「マン・ウォッチング」 P298より

2) 恥じらいは、自己劣等感に関係する。

唐木順三<sup>8)</sup>は「恥じらいは自己羞恥であると同時に、羞恥を感じさせる相手の立派さ、偉大さ、神聖さをも意味する」といい、また、佐伯梅友<sup>9)</sup>らも、わが国の古典に多用されている恥ずかしいの語義について「こちらがきまり悪く、気おくれするほどだと相手の立派さをいう場合が多い」と述べている。

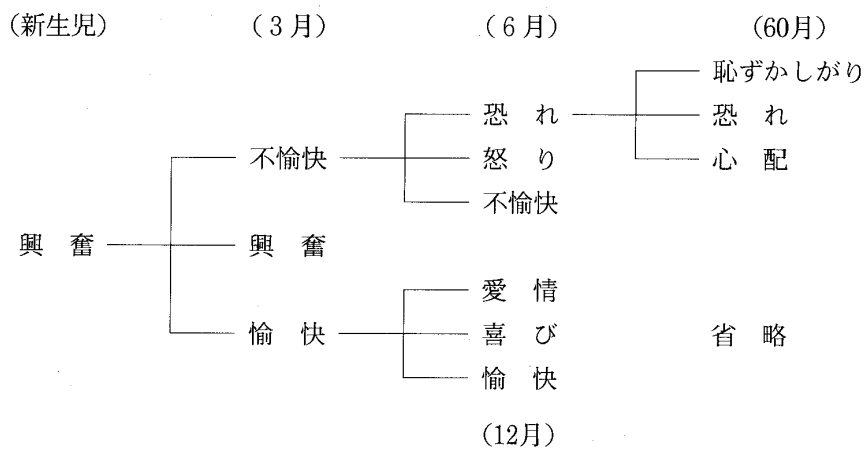
このことから知られるように恥じらいは、他人との比較において自分が劣ると意識したこと、もの及びときに起こるものであり、しかもそれは、われわれが「人間であるということは劣等感に苦しむことである」(Adler) 限り、だれもが、いつまでも持ち続けることになる感情の1つといえる。

3) 恥じらいは、自己保存欲に関係する

乳・幼児の情緒生活を観察したブリッジス<sup>10)</sup> (Bridges) は、情緒の分化・発達を図4のようにまとめている。

この図式から、われわれは次の2つのこと、すなわち、恥じらいの感情は恐れから分化したものであり、しかも不快の方が、快の感情より先に発達するということができる。

いうまでもなく、われわれはこの不快あるいは恐れのおかげで危険を回避し、ひいては生命の維持を可能にしているのであるが、そ



注 1. 本図はブリッジスの発達図式により作成した。  
2. ( ) 内の数字は、当該感情が発現する概ねの月齢を示す。

図4 情緒の分化・発達図式



図5 秦恒平著「枕草子」P93より

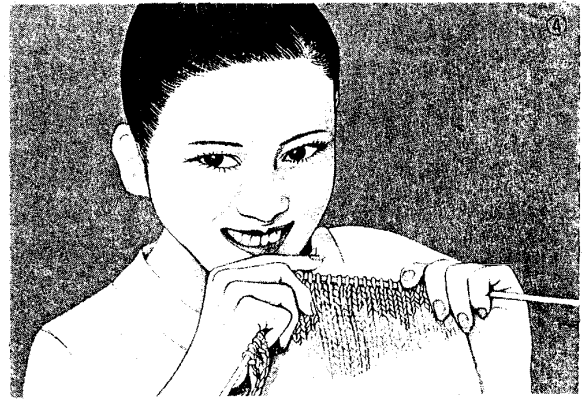


図6 「セクシー・ギャルの大研究」P161より

の好例を多湖輝らの説に求めることもできる。

すなわち氏は、恥じらいが性、食、排泄の3場面において発生していることに着目し、その理由として「これらの行動が一定の時間、われわれを無防備な状態におく。従って“外敵からの防衛手段”として恥じらうのだ」といっていることから了解できよう。

たしかにこの理論は、恥じらいの構造を解明するにあたり説得力を有するが、氏らもいうように、説明しきれない部分を持っていることはいなめない。

#### 4) 恥じらいは、女性に多く見られる。

既に述べたように、恥じらいは人類共通の感情であるが、その頻度及び強弱において男女差が見られるように思う。

ダリオ<sup>11)</sup> (Dariaux) は、その著「男と女の事典」の中で、「女は昔から恥ずかしがりやにきまっていたが、年がたつと次第に自信がきます」と述べている。筆者の調査でも、恥じらいの出現は女兒の方が男児より早く、また、その頻度においても女性の方が男性より多いことが知られている。

では、なぜ女性に恥ずかしがり屋が多いのであろうか。その理由として、社会的制約が存在することもさりながら、性差によるところが大きいように思う。

すなわち、女性は自己の身体構造よりして概して多くのことに受身的である。この受動性は対人関係において依存性を強め、しかもこまやかさと鋭敏さを併せ持つ感情特性に支えられて

殊のほか人間関係に気を使う。この気遣いは見られ意識を強め、自己抑制的な行動をとらせ勝ちとなる。

このように依存性を起点とした循環の輪の中で起きるのが女性の恥じらいと理解されるので、女性の方が男性よりも恥ずかしがることなのであるが、その恥じらいも思春期をピークに徐々に減退しはじめ、ある年齢や特定の状態になると相当程度減失するようである。この背景には、加齢とともに自信を獲得する。見せたい意欲や見られ意識が減退する。諦観、感情の鈍麻などが存在するためと思われる。

#### 5) 恥じらいは変化する

幼児前期から見られ始めた恥じらいも、児童期、青年期に至り順次分化・発達し、やがて衰退していく。その詳細は既に述べたので省略する。

#### 6) 恥じらいは、身体現象やしぐさを随伴する

このことについても既にふれたので、ここではその一例を提示するに止める。(図5.6参照)

### 5 恥じらいと裸

われわれの場合、恥じらいの対象の最たるものは裸体であり、性器のようである。このことは既にふれた。そこで、いつころから、どんな理由で恥ずかしがるようになったのかを、シュライバー<sup>12)</sup> (Schreiber.H) の「羞恥心の文化史」

より要約して紹介する。

原始人は、男女ともに衣服をつけていなかったようであり、その着用も当初は身体の保護と装飾が目的だった。特に性器をかくすのに役立つと思われる女性の下着は、その原型を腰布に求めることができ、それとても性的魅力を増すために用いたものようである。してみると、少なくともギリシャ時代までの男女は裸に対する恥じらいは少なく、むしろ他人に誇示できないような貧弱な体や、不道德な行為を恥じていたといえそうである。

ところが、ユダヤ人(教)がエジプトに渡ったところからその様相は変り、旧約聖書にあるように「ふたりの目が開け、自分たちの裸であることがわかったので、イチヂクの葉をつづり合わせて腰に巻いた」ばかりか、「キリスト教の人々はローマ人やギリシャ人たちの肉体的な美点と享受によせる喜びに真向から対立し、美德、謙虚、純潔、恭順を強調した」ので、裸が羞恥の対象となり、遂には「女が着物を脱ぐときは、羞恥心も一緒に脱ぎ捨てる」などといわれるまでになった。

このような歴史的背景を持つ思想や風潮が、時代や所をかえて引継がれてきた結果、裸を恥ずかしがるようになったものと思われるが、性器(含乳房)を隠すようになった理由はこのほかにもありそうである。

たまたま性器と恥じらいの関係については、留保したままになっているので、ここで取上げることにする。

理由の主なものとしては

- a 性器は生殖に関する重要な器官であり、特に女性の場合その構造・機能がデリケートなので保護の要がある。ちなみに人間以外の動物も、身体の一部を用いて常時保護している。
- b 性器の形状や陰毛等が、第三者に醜悪感や不快感を与えやすい一方で、接触欲や好奇心を刺激する。
- c 性器の露出によって、自分自身が性的被害者になる場合がある。
- d 陰部の発毛状況から性欲の強弱がわかる

といわれているので見られたくない。

- e 部位を隠すことによって相手の窃視欲を強め、自己の性的魅力を増すことができる。

なお、若者たちに見られる強度の露出も、ここに原因があるのかもしれない。

- f 他者との比較は、性的劣等感を強めかねないので、その原因を作りたくない。
- g 他者と違った行動をとることによる低い評価を受けたくない。
- h 「性は卑猥なもの」という観念が深層にある。

などの諸点をあげることができよう。

なお、前掲上野千鶴子によると、最近の若い女性は性器よりも胸部を隠す者が多いという。ちなみに筆者が調査したところによると、オールヌードでいるところへ、突然男性が現れたとき両手で胸を隠す…57%、両手で性器を隠す…15%という結果であった。

## 6 恥じらいと若者

前述したように、最近の若者たちの意識には変化が見られる。そんなことがあってか「このごろの若者は食物を口にしながら歩く。電車の中で大きな声で話す。恥じらいを知らない」などと非難されている。

実際そうなのであろうか。この疑問に対する回答は次のレポートから得てもらおう。

昭和59年、村松基之亮<sup>33)</sup>は「新・現代家族」の中で

「ほぼ満員の乗客がいるのに数人の女子中学生が、かん高い声で話しかけながら笑いころげたり、押し合ったりしてさわいでいる。初めのうちは苦笑いしながら眺めていたCさんだったが、あまりのことに『もう少し静かになさい。女の子はもっとやさしいもんだよ』と声をかけた。

とたんに女の子たちは『中年が何いうとる』『おっさんの出る幕やないで』とタンカをきったそうだ。(後略)」と記し、更に

「(前略) 電車の中などで若い男女がべちゃ



っている。男は割に周囲の目を意識するが女の方は男の顔をなでたり、手を握ったり、他人のことなど少しも気にしない。(後略)」と述べている。

また、丹野真美(31歳)も、平成5年8月18日付朝日新聞への投書「羞恥心を失った娘たち」の中で

「最近のディスコは、ほとんど下着姿か半裸に近い女性が、やたらに腰を振り、スカートの中を見せ、まるで娼婦の集りと化したようだ。

親は、娘がそんな姿でいることを知っているのだろうか。マスコミも面白がって取り上げるので女の子たちは図に乗っているようだが、これで犯罪など危険なことが起きなければ、と心配だ。

また、最近の女子高校生の制服のスカートがやたら短く、ひざ上10cmでは駅の階段で下から丸見えである。男性たちがほくそ笑むのを見ると、学校側の常識を疑う。女子高校生まで時代の流れに乗って、どうするというのだ。

彼女たちの中には、こうして見られることを喜んでいたり、小遣いほしさに自分の身に

つけた下着を売る子もいるという。同性として悲しい。

人に見られることが平気。快感となってしまう彼女たち。何がそうさせたのか。

この行為はいずれも軽犯罪であると思う。大和撫子を気取るつもりはないが、女性としての最低限の羞恥心は失ってほしくない。」

と記している。

上記指摘のようでは「このごろの若い女性は恥じらいを知らない」といわれても仕方あるまい。とって、それが非難や嘆きに終始してはならない。そのためにも、丹野がいうように「何が彼女たちをそうさせたのか」を明らかにする必要がある。

そこで、若者たちは世人の非難をどのように受けとめているかを見てみることにした。表4は、筆者が短大生を対象に「このごろの若者は恥じらいを知らないという世人の指摘をどう思うか」について、また、表5は「非難されるような行動が多くなった理由は何か」について調査した結果である。

それによると

a 世人の非難を肯定的に受けとめている者は10%と少ないこと。

表4 恥じらいを知らないという世人の非難に対する女子学生の反応

回 答	%	理 由	内訳の%
一概にはいけない	78	恥知らずの人もいるがそうでない人もいる。	52
		人によって違う。	17
		注意された時すなおに応じないため、恥を知らないようにみられている。	5
		必要な時には、わきまえた行動をしている。	4
そ の 通 り	10	公衆の面前で大声で話すなどわきまえを知らない人が結構いる。	7
		あらわな、あるいは不格好な姿を平気でしている。	2
		電車内で平気で化粧するなど身だしなみが悪い。	1
そんなことはない	12	恥は知っているが、知ったかぶりをするなど考えと行動が一致しないだけ。	7
		恥じらいを知らない年輩者もけっこういる。	5

注 調査対象等は表2に同じ

このように答えた背景に、合理化の機制が働いていることは想像に難くないが、世人の<sup>ひんしゆく</sup>輿<sup>ひんしゆく</sup>を<sup>ひんしゆく</sup>買うようなことをするのは、若者のすべてでないらしいことも事実のようである。

b 非難されるのは、目立ちたがりやたちによる集団行動であるらしいこと。

たしかに最近の若者たちは、情報社会に育っていることもあって一般に目立ちたがるが、顕著な目立ちがり行動は劣等感の補償行動であると理解され、そのグループには自己中心性、自己顕示性、依存性などの性格に偏りの強い者が多い。従ってその行動は派手になりやすく、しかも集団でなされる場合が多いので世人の注目をひきやすくなるなどのことが考えられる。

なお、上記のことについては上芝功博<sup>14)</sup>の、「最近の若者の中には自分の姿をつかめない者が多いこともあって、自分を弱小視しやすく、そのため弱い自分をなんとか守り心の安定を得ようとして、通常の場合では逃避するのに親しい仲間うちでは軽はずみな、あるいは顕示的な言動をして破目はずししやすい(要旨)」の指摘がより明らかにしてくれるであろう。

c 非難される行動の背景に、言行不一致などを特徴とする青年期の心理があること。

このことについては、「恥は知っているが、知ったかぶりをするなど考えと行動が一致しないだけ」という短大生があげる理由の提示で十分であろう。

d 恥じらいとしつけの間には相関があると若者たちも認めていること。

短大生たちも、恥じらい感情希薄化の理由として、表5記載の通り批判する側と同様しつけ不良、マスコミの影響などをあげている。

ただ、彼女らの指摘するしつけ不良の中には、恥じらい感不足とマナー不足とを混同視している感がしないでもない。しかし、しつけ不良の問題は、養育上はもとより恥じらいを考える上でも見逃すことのできない課題と思われるので、最近における家庭の教育機能低下の背景について一瞥<sup>べつ</sup>しておこうと思う。

望月嵩<sup>15)</sup>らは家庭機能低下の背景として、a.

表5 恥じらいを知らない<sup>と</sup>非難される理由及び背景

理 由	%
しつけがなされていないため、恥じらい感が育っていない。	38
時代やTVなどマスコミの影響。	25
けじめがつけられず他人に同調する、など最近の若者の特徴。	19
自由のはき違い。	13
ストレスが多いのに対して発散の場が少ない。	6

注 調査対象等については表2と同じ

現代家族が極めて小規模になり、その構成が単純になっていること。b. 雇用労働世帯の増加とともに家庭における父親の不在が一般的となり、教育機能が母親のみに集中する傾向があること。c. 父親が外で働くことにより家庭の中から生産機能が失われ、生産労働を通しての子どもへの教育が行われなくなったことの3点をあげ、「家庭の小規模化と父親不在の構造は、母と子の関係を濃密にさせるのに対して、児童期以降の甘えをコントロールするソトの行動様式を学ばせることができなくなった」旨の指摘をしている。

前述したマナー不足も、また、恥じらい感の希薄化も、ともにこのような家庭機能の低下に伴う自己統制力の弱さに基因すると思われるだけに、家庭機能の強化を図るための対策が急がねばならないが、恥じらい感減少の理由はほかにも沢山あり、しかも、そのいずれもが改善容易とは思われない。しかし<sup>きょう</sup>拱手は許されない。なぜならば、恥じらい感の希薄化が及ぼす社会的影響は、次に示すように大きいと理解されるから。

## 7 恥じらいが社会に及ぼす影響

内沼幸雄は、「見られることを求める露出欲求と、見ることを求める窃視欲求という2つの

本能的衝動に対する抵抗や、抑止力として働くのが恥じらいである」といっているが、このことは、われわれの欲望のバランスが恥じらいによって保たれているということの意味する。

従って、もし恥ずかしいという感情がわれわれの世界から消え去ると、われわれの社会はうろたえるおおいのないトゲトゲした社会になるばかりか、弱肉強食の社会になってしまうであろう。

なるが故にわれわれは、そのような実態の到来を防ぐとともに、惻隱の情に満ちた平和な福祉型社会の出現を願って、可能な対策をとり続ける必要がある。特に、将来保育の任にあたる女性には、丹野がいうように最低限の羞恥心を持ち続けて欲しいと願わずにはおれない。

本紙第19号において論じた私語の問題も、そこに学ぶ学生たちに、健全な恥じらい感情が育てていたならば発生しなかったはずである。

今こそ、老いも若きも、恥は恥じらい感情の延長線上にあることを想起すべきであろう。

## 8 恥じらいの育成

恥じらい感の育成を急がねばならないことは既に述べた。が、その前に考えておかねばならないことがいくつかありそうである。その1つとして、大人たちの非難に対して若者たち<sup>16)</sup>が、「それは事実でない」「一方的な批判は身勝手」と反論したり、「そんな若者を作ったのはだれか」などと反発しているという事実の存在があげられる。

ここにおいてわれわれは、若者批判の基準の再検討に加えて、恥じらいを知らない彼等を作ったのは他ならぬわれわれ大人であることに思いを致し、若者への接し方や子育てのあり方について反省してみる必要があるであろう。

まず若者非難の基準であるが、前掲レポートからも知られるようにわれわれは、恥じらいとマナーを混同視しているようである。たしかに恥はマナーに連動するものではあるが、このような混同視は、ことの本質をみまちがえることになりやすいので再検討の要がある。

次に若者への接し方であるが、高飛者に出るのでなく、若者たちも要望しているように「自分の若いころを回想して」接すべきであろうし、仮初めにも、若者たちから「恥じらいを知らない年輩者も結構いる」などの指摘を受けることのないよう身を持すべきであろう。

最後に、子育てのあり方についてふれておきたい。ブリッジス<sup>17)</sup>によれば、5歳児になると恥じらいの感情も概ね大人並みに分化するという。従って、少なくとも次の諸点、すなわち

- a 保育者は「シエマ (Schema……生得的な生活図式) に活力を与え、人を行動に駆りたてるのが情緒である」<sup>18)</sup> というピアジェ (Piaget) の言葉をかみしめ、感情重視の保育に努めること。
- b 感情は、生後2～3歳までの親との愛着関係の成立によって発達するものであることを忘れないこと。<sup>19)</sup>
- c 1～3歳ころまでは家庭内において社会化を促す時期である。<sup>20)</sup> 特に当該期の発達課題は、前段階の課題が達成されてはじめて成就できるとの認識を持つこと。
- d 乳幼児は母を信頼し、また、親のすることは絶対と思っているので、親は模倣されるにふさわしい日常生活を送るようつとめること。
- e 遊びを通して、他人や自然との交流・接触を深め、感受性や共感性といった情性を養うこと。

などに留意し、豊かな感情の育成に努むべきであろう。

## むすび

われわれが現代に生き、若者たちと共存している限りにおいて、若者たちの意識や実態を知る必要がある。そのような認識から、筆者はこの数年来女子学生を対象に「摂食障害」「私語」など身近かな問題を取りあげて研究してきた。本研究もその一連のものである。

大見栄切って取り組んではみたものの、問題

が余りにも大きく、しかも文献やデータにふりまわされて大事なことを見落してしまったように思われてならない。足らざる点は早急に補っていきたいと思っているので各位の御指導と、忌憚<sup>たん</sup>のない御批判を願ってやまない。

なお、本学教授山田勝弘氏の御助言を得て、

古典に見られる恥じらいの考察も手がけてみたが、能力不足及び紙面の都合で割愛した。

最後に、本研究の実施にあたり種々便宜を供与いただいた本学の図書館員各位に、紙面を借りて厚くお礼申し上げる。

(H 5. 9. 30)

#### 主なる引用文献

- |    |              |                                  |           |      |
|----|--------------|----------------------------------|-----------|------|
| 1  | 大林道子         | 平成5年2月24日付朝日新聞『論壇』               |           |      |
| 2  | 多湖輝          | 相良守次編『人間の欲望・感情』                  | 大日本図書     | 1968 |
| 3  | 内沼幸雄         | 『羞恥の構造』                          | 紀伊国屋書店    | 1983 |
| 4  | 上野千鶴子        | 『セクシー・ギャルの大研究』                   | 光文社       | 1989 |
| 5  | 内沼幸雄         | 『羞恥の構造』                          | 紀伊国屋書店    | 1983 |
| 6  | 大場幸夫         | 「児童の社会的行動に関する研究」ⅡⅢ『日本保育学会研究発表論文』 |           | 1976 |
| 7  | デズモンド・モリス    | 『マンウォッチング』上・下                    | 小学館       | 1992 |
| 8  | 唐木順三         | 『日本の心』                           | 筑麻書房      | 1973 |
| 9  | 佐伯梅友<br>桐原徳重 | 『基礎古語辞典』                         | 教育出版      | 1975 |
| 10 | ブリッジェス       | 「情緒の分化・発達図式」『児童心理学』              | 全国社会福祉協議会 | 1991 |
| 11 | ダリオ          | 『男と女の事典』                         | 鎌倉書房      | 1973 |
| 12 | シュライバー       | 『羞恥心の文化史』                        | 河出書房新社    | 1984 |
| 13 | 村松基之亮        | 『新・現代家族』                         | ミネルヴァ書房   | 1984 |
| 14 | 上芝功博         | 「最近の対象少年の特性と鑑別上の問題点」『刑政』104巻8号   |           | 1993 |
| 15 | 望月高<br>木村汎   | 『現代家族の危機』                        | 有斐閣選書     | 1980 |
| 16 | 太田将信ほか       | 平成5年3月朝日新聞「テーマ討論・いまの若者」          |           |      |
| 17 | ブリッジェス       | 「情緒の分化・発達図式」『児童心理学』              | 全国社会福祉協議会 | 1991 |
| 18 | ピアジェ         | 「情緒の発達」『児童心理学』                   | 全国社会福祉協議会 | 1991 |
| 19 | ボールビィ        | 「愛着と愛着行動」『児童心理学』                 | 全国社会福祉協議会 | 1991 |
| 20 | 林雅次          | 「人格と発達と形成」『精神衛生』                 | 全国社会福祉協議会 | 1991 |

— 児童教育学科・幼児教育 —